

(p.p.39)

われわれは話すことで何かをすることができる。約束をすることも、賭けをすることも、警告を発することも、船に名前をつけることも人をある地位に任命することもお祝いの言葉を言うことも、証言に際して宣誓を行うこともできる。クローゼットに牧羊犬がいることを警告する、とすることで、あなたは何らかのことを言うだけでなく、誰かに警告するのである。bet, promise, warn などのような動詞は遂行動詞である。それらを文中で使うことは時として非言語的行為を行うことと同義かもしれない。どの言語にも何百もの遂行動詞がある。以下の文はそれらの語法を示している。

俺は君にヤンキースが勝つことに 5 ドルを賭けるよ。

試合を申し込むよ。

この線を越えられるものなら越えてみる。

オレガノの所持に対して罰金 100 ドルを科す。

延期するように変更する。

バットマンをゴッチャムシティの市長に推薦する。

改善をお約束します。

やめます！

これらすべての文中で話者が主語であることと、口に出すとき、文はいくつかの非言語行為、つまり挑戦、推薦、辞任のような行為を行っているということに注目しなさい。

(p.p.40)

また、これらすべての文章は肯定的であり、宣言的であり、そして現在系である。これらすべては遂行文の典型である。

実際、あらゆる発言は何らかの種類の発話行為である。たとえ *It is raining* のように遂行動詞がなくても我々は陳述の中で暗に示された行為を認識することができる。他方で、*Is it raining?* は疑問という行為を遂行していて、ちょうど *Leave!* のような文は命令という行為を遂行している。もしわれわれが選んだとき、われわれは実際に遂行動詞を使うことができるだろう。I state that it is raining. I ask if it is raining. I order you to leave. のように。

言語は隠された約束、祝杯のあいさつ、警告、などで満ち溢れている。I will marry you. はある約束という暗示的な行為を遂行しており、適切な状況下では、それは I promise I will marry you. のような約束となる。簡潔に言うと、席から立ち上がって、グラスを手にとって、The health of our host と言えば、それはまるであなたが I toast the health of our seat とやったかのように紛れもない祝杯のあいさつとなる。

われわれが文章を用いてどのように事をなすのかという研究は発話行為の研究であ

る。発話行為の研究においてわれわれは発言の文脈の重要性に強く気づく。いくつかの状況においては、「クローゼットに牧羊犬がいる」は警告になるが、全く同じ文章が約束になったり単なる事実の陳述になったりすることもあるが、それは状況に依存する。

発話行為理論は、質問ではなく命令を意味するのはいつなのか、又は特別な意味を込めると反対のことを意味するのはいつなのか、ということのをわれわれに伝えることを目的としている。それゆえ夕食のテーブルで **Can you pass me the salt?** は **Pass the salt!** という命令を表す。それは情報を求めているわけではないし、**yes** は不適切な反応である。依然として、さらなるユーモアがすべてを文字通りに受け取る登場人物によって果たされている。

(p.p.41)

HAMLET おい、この墓はだれのものだ？

CLOWN (墓掘り人) はい、私のものですが。

HAMLET それを誰のために掘ったのだ？

CLOWN どの男性のためでもありません。

HAMLET ではどの女性のためだ？

CLOWN どの女性のためでもありません。

HAMLET この中にだれが埋められることになっているのか？

CLOWN はい、生前女性だった人です。しかし彼女は死んでしまいましたが魂は残るでしょう。

HAMLET なんというならず者なのだ。われわれは正確に話さなければならない、さもないと曖昧な言葉がわれわれを崩壊させてしまう。

文脈が、私達が文を解釈する方法に与える影響に関する全般的な研究は語用論と呼ばれる。発話行為の理論は語用論の一部であり、語用論そのものは我々が呼んでいるところの言語的な行為である。

発話者はよく現実世界についての明示的な仮定をしており、発言の意味はそれらの前提—つまり何人かの言語学者が前提と呼んでいる—に左右される。以下を考えてみなさい。

- (a) あなたは牧羊犬を抱かないのですか？
- (b) 誰がそのバドミントンセットを買ったのですか？
- (c) ジョンは風呂場で詩を書かない。
- (d) 今のフランス国王は禿げている。
- (e) もう一杯ビールはいかがですか？

(p.p.42)

(a) では、発話者は、聞き手が少なくとも過去に何回か彼の牧羊犬を抱いたことを前提にしている。(b) では誰かがすでにバドミントンセットを買ったことを前提にし、(c) ではジョンが詩を書いたことが前提にされていた。もし私達が以前フランスに国王がいなかったことを知らなくても (d) の文章を理解することさえできる。定義された言葉を使うと、たいていある存在する指示対象を前提にしていることになる。もし、前提としたことと実際の世界の状態との間に一貫性が見いだせないとき、その発言はおかしいと感じられる。

もし誰かが (e) をあなたに言うようなことがあればその文の意味にはあなたが少なくとも一杯のビールを飲んだことがあるということを前提にするか仄めかすかしているのであろう。**another** という単語の意味の一部にもこの種の前提を含んでいる。不思議の国のアリスの帽子屋の発言は私達が納得しかねるものである。

「茶あもつとのみなよ」と三月うさぎが、とってもねっしんにアリスにすすめました。

「まだなにものんでないのよ。だからもっとなんてのめないわ」アリスはむっと返事をします。

「ちょっとはのめない、だろ。なにものんでないなら、ゼロよりもつとのむなんてかんたんだあ」と帽子屋さん。

このユーモアの面白いところは言語を知っているということは **more** という単語の意味を知っているということも意味するというところにある **more** は何もないよりも、ではなく何か存在するものよりもという意味である。言い換えれば、**more** はこの語法においては前に存在した何かを前提にしているのである。